

石黒武人 著

『多文化組織の日本人リーダー像：ライフストーリー・インタビューからのアプローチ』

(春風社、2012 年、四六版、408 頁、3,000 円＋税)

永井那和

本書は、現在、明海大学外国語学部英米学科講師であり、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の第一期生でもある石黒武人氏によって記されたものである。本書の内容は、2007 年度に当研究科に提出された博士論文に基づいている。きわめて個人的なことだが、本書の謝辞にあるように、コミュニケーションや文化について熱く語り合った「ラウンド・テーブル・トーク」の参加者の一人として、そして、異文化コミュニケーション研究科の後輩として、このような形で氏と「対話」できることに大きな喜びを感じる。以下、「書評」というテキスト・ジャンルに埋め込まれた、氏と私の対話の痕跡を記す。

まず、『多文化組織の日本人リーダー像：ライフストーリー・インタビューからのアプローチ』というタイトルを敷衍^{ふえん}しておく。『多文化組織』とは、主に、「多様な文化を背景とするメンバーが所属する組織 (p.1)」ないし、「三つ以上の異なる文化を出身とする人々が協働する組織 (p.13)」のことである。そして、『日本人リーダー』とは、広い意味では「社長や CEO といったトップ・リーダーではなく、部長、課長などの管理職と係長以下の現場管理者 (p.40)」のことであり、狭い意味、領域特定の意味においては、「E 学校 (英会話学校、あるいは、英語学校) で英語圏出身講師の管理・指導に携わり、彼らと日々協働する日本人マネジャーおよび主任講師 (pp.215-216)」をさす。また、ここでいう『像』とは、主に、文化と相互的影響関係にあるコミュニケーション行動に関わる、平均的な、(プロト)タイプの、抽象された本質主義的な特性だけでなく、フィールド調査から実際に観察された、トークンとして現れた構築主義的な特性、これら二者を含意している。本書は、以上のような意味での多文化組織の日本人リーダー像に、構築主義、エスノメソドロジー、物語論と知見を共有する対話的構築主義に根ざしたライフストーリー・インタビューから接近するプロジェクトである。

本書は、3 部 8 章から構成されている。まず、第 1 部の理論的研究 (第 1 章から第 4 章) では、多文化組織におけるリーダーの要件 (第 1 章)、日本人リーダーのコミュニケーション行動 (第 2 章)、多文化組織における日本人リーダーのコミュニケーション行動 (第 3 章) に関する先行研究を批判的に吟味し、それらを総括したうえで、限界を同定 (第 4 章) している。

その工程を通じて、多文化組織のリーダーの諸特徴と日本人リーダーの特徴を付け合わせ、多文化組織における日本人リーダーの課題を (1) リーダーシップ・スタイル、(2) コミュニケーション・スタイル、(3) フォロワーに対するフィードバック、(4) 文化的多様性に対する取り組み、(5) 誤解、摩擦、問題に対する意味付与、(6) フォロワーの捉え方、という六つの観点から浮き彫りにし、さらに、既存の研究の問題点として、(A) フォロワーからの視点の研究の不足、(B) 異文化コミュニケーション的な定性的研究の不足、(C) 仮説生成への志向性をもつ研究の不足、以上の 3 点を指摘している。

第2部のフィールド調査(第5章と第6章)では、第1部の理論的研究で明らかとなった三つの問題を乗り越えるために導入した理論的、方法的、分析的な枠組である対話的構築主義に依拠したライフストーリー・インタビュー(第5章)に基づき、多文化組織的な環境である英会話学校・英語学校(本書ではE学校と呼称)で勤務経験がある3名のフォロワー／調査協力者(および、調査実施時は、あるE学校の非常勤講師であった調査者自身)の声をデータとして収集し、そこから読み取れるフォロワーの個人的な認識世界を描出、日本人リーダーのコミュニケーション行動を分析している(第6章)。

分析についてもう少し詳しく見てみよう。半構造化インタビューというジャンルの相互行為において、(1)日本の組織で働く際に直面する問題点、(2)日本人リーダーの良い点と悪い点、(3)理想のリーダー像、(4)多文化組織のリーダーの要件といったトピックを中心に展開するフォロワーの語りは、じつにさまざまな「ストーリー」から成り立っていることがわかる。そのストーリーでは、たとえば、E学校における「日本人講師 vs 外国人」「常勤 vs 非常勤」「労使関係」として概念化された、異なる社会的範疇間の二項対立関係を包摂する「分離のストーリー」や、「あたりまえ」なことに對する、とりわけ相対的な非明示性や、外国人フォロワーに対する「お客さん扱い」「形式だけの包含関係」、講師同士の授業参観やその後になされるフィードバックという出来事に対する理解のズレ、日本人リーダーが見せる「組織人」としての顔と「個人」としての顔のかい離などといった、日本人リーダーのコミュニケーション行動に関する多様なストーリーが開陳される。

対話的構築主義に依拠したライフストーリー・インタビューの分析方法でとくに興味深く、特徴的だと思うのは、調査協力者と調査者の相互行為を通して立ち現れたストーリーに対する多重的かつ再帰的な、つまり、きわめて慎重な分析的姿勢であろう。ストーリーは、外国人フォロワーが生きる、異文化インターフェイスとしての多文化組織の様態が、どのようにフォロワーの視点から理解されているかについての手がかりを提供していることはいうまでもない。しかし、本書で採られている分析手法は、「収集されたストーリーから、E学校は、そして、日本人リーダーはこうなのだ」というナイーブな、飛躍した論理展開を言及指示的に明示的に、頑なに拒否し続ける。ある特定の視点から経験され、言語表現として凝集・編集されたストーリーの特性、そして、それをある特定のコンテキストにおいて語る、つまり、再コンテキスト化するという、メタ・コミュニケーション的な要素が複雑に絡み合っている「事実」を看過することなく、それと向き合いながら、語られたストーリー自体が示す多文化組織という認識世界・ディスコースの世界での出来事、それに対する調査協力者の態度、さらには、それを語る調査協力者のストーリー内の位置づけと、語りが生起する場で協同的、即興的に築いている相互行為のミクロなコンテキストにおける位置づけに対する考察、このような多重的な分析的視点は、各々の調査協力者の認識世界を立体的に読者に提示することを可能にしている。また、データ断片の提示、その解説・分析という二重奏形式と呼ばれる記述スタイルを採ったとあるが、とくに定性的な研究につきまとう分析の質・量に対する恣意性を強く自覚した分析はつねに、なぜ、そのように解釈したのか、何をもってそのような解釈に至ったのかという道筋をはっきりと示す再帰的な視点が多分に含まれていることから、データ解釈だけでなく、データ解釈の提示の仕方という点でも多重的であり、三重奏・四重奏的厚みをもった分析がなされている。このことから、石黒氏の「慎重さ」、そして研究自体の「公共性」や「反証可能性」がテキストに十全に反映されているといえよう。

最終部となる第3部の総合考察(第7章と第8章)では、第1部の理論的研究で特定した三つの課題を、第2部のフィールド調査とそこで援用されたアプローチがどのように乗り越えたの

かを考察し（第7章）、終章においてフォロワーのリーダーシップ認知に関する説明モデル（すなわち仮説）を提示、さらには、異文化コミュニケーション学という学際的な志向性を有する領域との関係に言及し、自らをその中に位置づけ、論を結んでいる。

以上のような立論過程が結ぶ「多文化組織の日本人リーダー像」は、端的に言って調査者／分析者の恣意性を超えた先にある、論理的一貫性と臨場感をともなったものであり、それは、筆者も含め、E 学校での勤務経験を有する者にとってはなおさら、そのように感じられるものであろう。多文化組織の異文化コミュニケーションにおける、なんとも言語化しにくく、さらに、話題にもあげられにくい点を正面から鋭く描出していることから、本書は、（異文化）コミュニケーションに興味関心をもつ人びとにも当然、示唆的であるだけでなく、専門的に学問に従事していても、現場でもどかしい思いを日々経験している「リーダー」たちにとっても、実践的な有用性を期待できる。「日本人中心の組織のなかでは弱い状態にあると考えられる」（p, 307）文化的認知力についての指摘が本書でなされている以上、日本語を解する読者であれば、本書を読むことでそのことについて十分に意識化できるであろうが、本書は、フォロワーの立場にある読者にも有用であることは容易に推察できる。そうである以上、これからの多文化組織における双方向的な相互理解を促進する一助として、たとえば本書の将来的な英訳の出版を強く期待したい。